

連休も後半、暦の上ではもう夏の始まりです。こいのぼりが青空に泳ぐ好季節、私たちの心にも爽やかな聖霊の風が吹いて、新しい力に満たされますように・・・。

復活はない？

前回のファリサイ派の非常に世俗的な議論とは対照的に、今回のサドカイ派の人た質問は由緒正しく、上流階級の人たちらしい、優雅で、論理的な議論でした。虹の向こうの世界に、復活はあるのか、という問題です。

彼らの先祖代々の答えは、復活はない、でした。その根拠はモーセ五書には、そのような教えがないから、という単純明快なものでした。しかし、イエス様はナインのやもめの息子を生きかえらせ、ラザロの復活の奇跡で人々の支持を集めていました。彼らにとってイエスは、自分たちのプライドをざわつかせる異端児だったのです。

現代でも、所謂ランクの高い知識層の人々は、死者の復活など、たわ言として扱う人が多いでしょう。そんなことに希望をおくのは、よっぽど現実がみじめで、そう思わないと生きていけない人だけだと。神様が一つの部分（パート）であり、プライドや、家族や、財産や、他にもいろんなパーツと同じだと考えてその秩序を成り立たせている人にとって、復活は、その世界の辻褄を飛び越えて、積み上げたものも無駄にしてしまう、どちらかといえば厄介なシロモノなのかもしれません。

復活はある

イエス様は、彼らの心に新しい地平線を見せる言葉を与えられました。この世界の、あなたの考えている秩序は、全てではないと、宣言されたのです。肉体の滅びた先の世界は、肉体を離れて生殖という行為はありません。金銭や組織もなく、それらは何も役に立ちません。家族も、財産も、地位も、地上の世界の法則が、一切働かないのです。神に愛されている、その法則だけが、霊に新しい命を与え、神の中に喜びに満たされて存在し続けます。

イエス様はさらに「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神だ」と言われました。死後の世界を思う以上に、今生きている私たちが、この神の法則と秩序のもとに生きるとは、どういうことかを答えなさい、と命題を与えられたのです。そして、はっきりと、モーセ五書に「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と書かれているのは、彼らが神によって今も生きている、すなわち復活の信仰の証明であると、反論されたのです。復活を信じて、今を生きよと、イエス様は私たちを招かれます。

ある人にとっては、優先順位が変わり、ある人にとっては、判断基準が変わるでしょう。価値観が壊されることは、新しい喜びや希望と出会う始まりなのです。

この問いの前に、私たちはどう応答するでしょうか。その生き方が、み心に心を合わせる祈りが、主の復活の輝きを、私たちの心をプリズムで照らしてくださいませ。